



安方忠義傳
 前編四冊
 卷之一

13
 3237
 1



ほきてあつれてあつく涙の雨のおとくみ血よてうあひご。それ泪かづて
分らんどうのゆゑみ。兼せとさきこりふ以上

奥羽観跡聞老志

三之巻曰。安方鳥。

方或号或号ニ善知鳥

相傳是所産干外濱也。近來春夏之交商人賣之其

大似小鳥而通形淡黑。長首尖嘴。脚共黄色。但自

領下至下腹純白。商人曰之善知鳥。食之則有脂甚

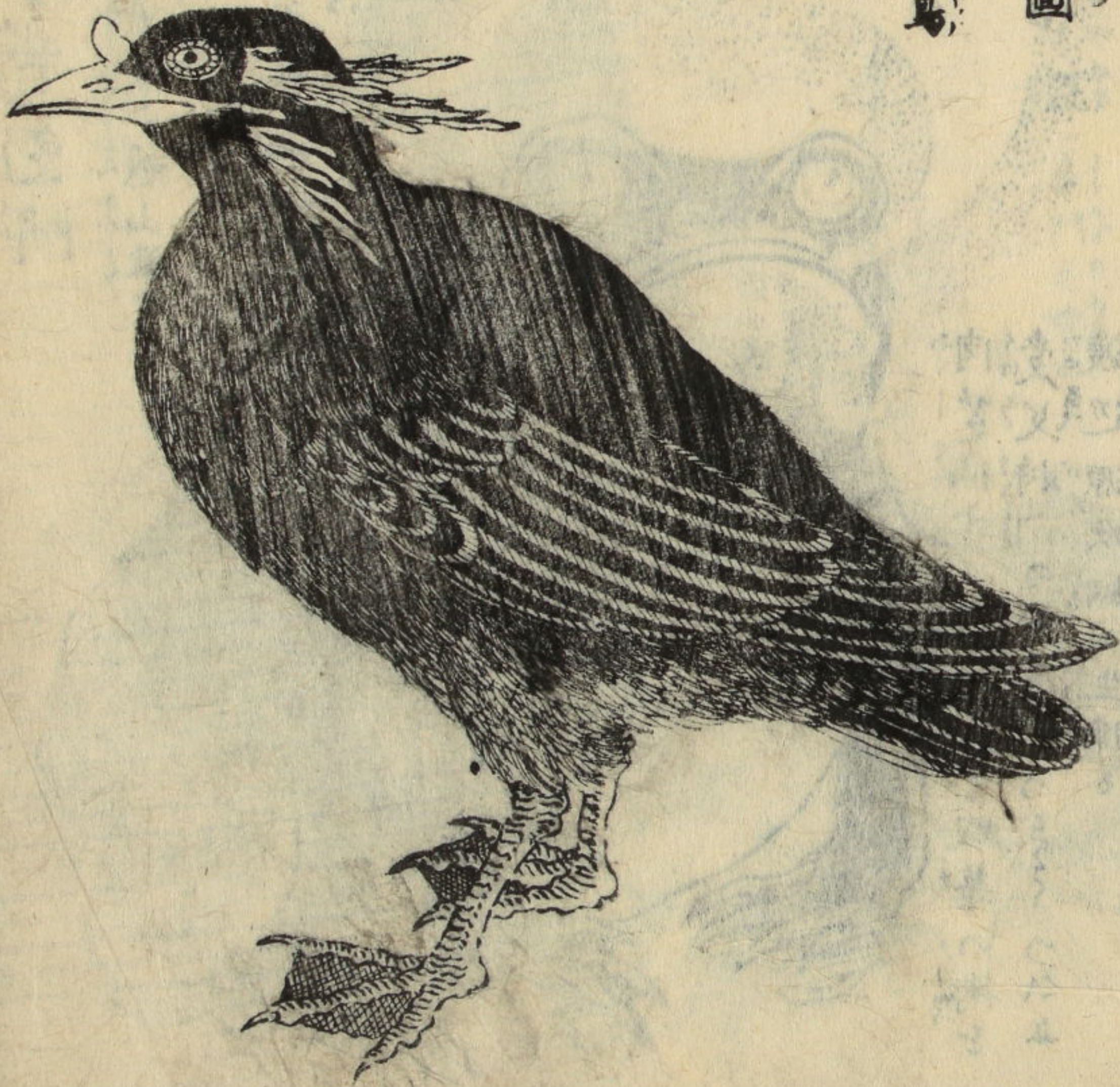
美。其好味不減。綠頭鴨云々

愚案亦善知と云ふ蓋曲小。親ハカと云ふれと。子ハカと云ふと答はり。親ハ空也。血の泪
をふせぬれと云ふ義や。さどほくまの藻塩草の説みもさき飛鳥の子と云ふ
人みかると云ふと殺生のむくのともやする理を示したるものさき業平の歌み泪と亦
くかすと云ふもさあれば。ばもの血のさきと云ふと。さきさきひ伊人と云ふ

考證終

○善知鳥寫生圖

和漢三才圖會云。紫善知鳥。鷗之屬。形色似鷗。而紫黃。末勾脚。淡赤色。奥州率土。濱有之。特津。輕安瀨。浦邊多云々。醒々案。小同谷。小圖を。出して。白き鳥也。かめめ。小似。今其。写生を得て。摸出ぬ。



將軍太郎平良門

稚少て強氣力量衆の越山獸と
追て弓箭をくらみ
牧馬狐馳て御術を



肉芝仙の
受父將の
渡辺源次
の悪意を
つとめて
蝦蟇の術を
生捕る

將軍息女滝夜刃姫

良門之婿也

始菩提の
道入て
如月尼と
後俗に
國色仙姿
烈漢の膽氣
頼光頼信の武徳



○善知安方

将門の臣六郎

公連の子あり

父諫死

の後

陸奥小

ささへ

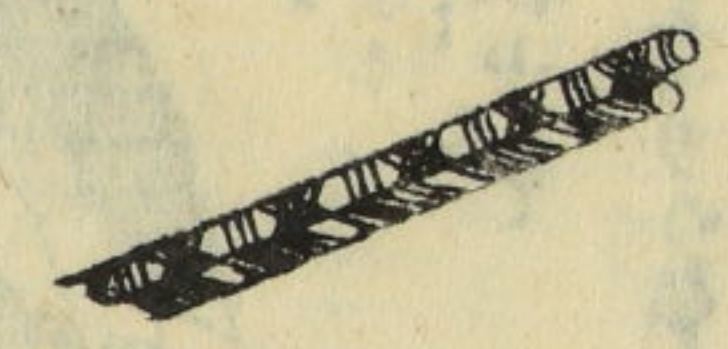
外が濱の

獵師とたつ剋門を

諫て自殺し魂魄鳥と化して

る不いさめ成やあぞ忠義比類は

化る処の鳥を世に善知鳥とらへ



○善知妻錦木

貧をちのび苦成りさる細布を織て一子を養

悪視の為不慮まゝられ活地獄の

責をうけて操成りさるるつひ小

自殺し魂魄鳥と化して夫の

死路をよがぬ一生の真心

たゞは



○片輪車怪



暗夜街とめぐり 小兒をとりて
鮮血を吐息のほをばらりて 来去の所とちりて

○藤六左近女唐衣

大宅光國が
妻あり

顔の花の
ふくみし肌
聖ふたむねをば薄命ありて種くけ
災を累とりくども孝貞の功德ありて
遂小天日乃 切く時を得たり
次ふありそい大宅太郎光國古御所の
妖怪をあらむる圖あり 餘紙ありて
よりこそこのゆゑに記さる





西海道 卷之二 西海道 卷之二

純友の腹心
相見兇悪
身長七尺
過力量
千代
瓜
黒崎
宰府の
両戦小武
勇たのほそ純友
後越中立山
かろつひふ七十餘歳
を戮せしれ



繪とくりの原畫の目を慰るの事れい画人の意を枉し今様
の目あれたるさぬ画しむさるうちもたぬく古ふわづくもの
さ急み本據の圖目を記してふれぬけき画風をりちきしむ

○源頼光土蜘蛛退治物語繪 詞書ハ兼好繪ハ土佐長隆ト云傳

○十界圖 口融帝勅シテ惠心僧都往生要集ノ事ヲ写サシム番替ハテハ僧都ノ筆也

○法然上人行狀繪卷物 後伏見帝ノ勅ヨリテ正安ノ頃修造スト云

○百鬼夜行圖

○蘭人解體圖

○土佐光信變化圖 春ト翁画巧濳覽ニ出ス

善知安方忠義傳前編總目錄

みちのくみたる地名をりて條の字號をりてかゝるも

卷之一

索規瀆 第一條

將門逆心公連諫死の事善知二郎零落の事

武藏五郎打死の事

信夫山 第二條

將門息女如月尼の事平太郎生立強氣の事

善知安方旅立平太郎を尋る事

白川關 第三條

平太郎筑波山み登て肉芝仙みあひ蝦蟇の術

を授り非望を企る事

安積山 第四條

如月尼平太郎が悪企みくみたる事善知安方諫死の事

○卷之二

宮城野 第五條

鷲沼太郎則友回国修行の事越中立山現在地獄の事

狭布里 第六條

善知一子千代童孝行の事医師老熊非道を行事

十符里 第七條

善知夫婦の魂魄鳥と化し事安方村善知坂の事

○卷之三 上册

名取川 第八條

源頼信媼酒み耽り藤六左近を手打の事藤六俳諧体の歌み堪能の事

盤提山 第九條

一条棧敷屋の鬼片輪車の事藤六が妻鬼み子をさる事

荒野牧 第十條

大宅太郎光国志賀の山越して賊婆みあふ事医師老熊唐衣を奪事

○卷之三 下册

無古曾關 第十一條

大宅光雅遺言陰の太刀の来由如月尼百日無言の苦行

を修する事

下細關

第十二條

如月尼羽太九四郎を殺て唐衣を奪事荒猪丸雪夜勇戦の事

○卷之四

起居里

第十三條

大宅光国旅路み赴事良門蚺蛇の升天を見て志を励事善知夫婦の亡魂良門を諫る事

阿武隈川

第十四條

良門併みおちて賊寨ひいて伊賀寿太郎みあ事大郎九州軍物語の事

松島

第十五條

伊賀寿太郎良門が味方み屬と事良門権み寨主と事將軍太郎と名告事

衣衣山

第十六條

柴刈男相馬古戦の物語の事大宅光国舊内裏変化を

○卷之五

霞谷

第十七條

遊仙窟の管絃勇士をさる事荒猪丸が一箭光国を伏

以為橋

第十八條

滝夜刃姫舊内裏み花の宴を催す事光国詩を吟じて
宴席み召らす事

緒絶橋

第十九條

官兵舊内裏とより圍て滝夜刃姫を亡と事源頼信
光国み賞を賜事

小鶴池

第二十條

將軍太郎良門術を施して蝦蟇の鬮をさそしむ事
善知夫婦の亡魂再良門を諫る事

以上前編目録終

善知安方忠義傳前編卷之一

緑亀館文庫

江戸

山東京傳著

索引

第一條

爰人王六十一代朱雀帝の御宇小ゆりて相馬小次郎平将門ハ其
為人狼戾めし礼法小拘ど非望を謀て朝家を傾推て帝位小登んと
せりひ立承平二年下総國石井郷小都を建新小大内裏瓜造宮
して二十二の門七十二の前殿三十六の後宮尺く金銀を鑄り珠玉瓜
銚りんば其費のくくると云夏をまらさど則自平親王又新皇帝と
号し百官を倫衆職を置大臣納言八座七辨文武の両官八省百官
尽く點定し其闕するハ唯曆博士むらり然る小将門の家臣

善知安方忠義傳前編卷之一

六郎公連といふ者。主君叛逆の評議をす。大に嘆て和漢の先蹤を引。
 を尽し理を糾し。のまうさび諫言せしむ。將門少しも用さるべ。龍逢
 比干が諫て死せし例ふか。腹かささかひて死し。將門これと憤
 公連の家を没収し。一子次郎安方を捕て。國の境を追搦。かくて次郎
 安方。父が非命の死を悲。そのふ自殺せん。とを妻錦木。さうくさめ。
 夫婦より。下総を追搦。奥州外。濱ふく。つづの住家。ぬる。本名
 をうじて善知と名告。あり。ふと。さ。業。も。の。り。と。夏。海。ふ。さ。ざ。り。
 冬。山。か。り。つ。して。不。と。さ。煙。を。と。て。夫婦。あり。露。命。を。ど。は。る。け。け。
 去。後。小。將。門。の。日。を。追。て。猛。威。を。ふる。ふ。關。八。州。を。打。る。び。け。己。小。都。小。政
 の。が。ん。と。議。し。る。ふ。と。中。都。小。さ。え。土。平。太。貞。盛。打。手。を。と。ひ。う。け。
 田原藤太秀郷と合体し。將門とむ。合戦。小。お。よ。び。る。さ。て

善知安方。外。濱。小。住。夢。の。間。小。春。秋。九。年。を。と。り。天。慶。二。年。小
 つ。し。つ。頃。日。街。の。つ。を。さ。い。け。貞。盛。秀。郷。大。軍。を。り。つ。て。將。門。を。攻。已。ぬ
 今。合。戦。真。寂。中。あ。る。將。門。敗。軍。小。及。ぶ。よ。を。語。け。し。罰。せ。れ。る。
 能。あ。る。も。さ。と。忠。士。の。心。を。主。君。の。身。の。土。氣。づ。り。二。つ。あ。る。男
 鷲。沼。庄。司。光。則。將。門。の。家。臣。の。安。否。を。も。ま。り。妻。錦。木。も。父。光。則。り
 打。死。り。や。と。ん。と。大。う。さ。る。を。案。じ。れ。ば。安。方。俄。小。の。立。る。ふ。を
 へ。と。下。総。の。國。を。こ。ろ。さ。り。旅。立。り。か。て。乃。を。急。さ。け。る。不。と。ふ
 日。の。ど。ど。將。門。の。た。て。薨。る。嶋。廣。山。の。麓。小。は。さ。ね。此。時。は。是。天。慶
 三年。二。月。十。四。日。の。雞。鳴。の。頃。也。朝。霧。は。く。た。ら。ら。り。四。方。朦。朧。さ。り。
 の。こ。う。う。あ。る。権。休。て。様。子。を。窺。る。不。忽。四。方。小。貝。鐘。の。声。大。お。起。り。
 數。万。騎。の。鯢。波。箭。叫。の。音。天。地。も。崩。ら。り。さ。り。合。戦。こ。と。ま。り

くるりと。かゞりゝのこやう小社の裏うら小をひきめて。まま様子ようすをうらみひるふ。霧きり
 のまがたふりかぐの旗はた翻ひる翻ひるして。雲くもよりおつる花はなの波なみ霞あせふ。まがひと
 ささるはしまし形勢けいせいなり。折をりしも東ひがしの方かたより。了つひ角かくの若わ武者むしゃ一騎いつき馬うまを馳はて
 出い来きる。安やす方かたさてもちわじやとちひつ。げ武者むしゃの打う拵ぎをうらふ。白しろ星ほし乃
 曾もと赤あか糸いとの腹はら巻まき巻まきして。青あお純じゆんの大おほ口くちをたれ。宿まひつ鴉つが毛げの馬うま小こ金かね具ぐの鞍くらを
 おさそて。やうらうら。わさそて手てを負おひしと見みえて。總そう身しん朱しゆ小こ海うみ。息いきもたれけ
 ろうらうら。後あとを顧かへりつ。手て綱づなふりぐりころころの松まつ蔭かげ小こ馬うまをさめて。てて体ていひ
 ける。かゞり所ところ小こ百ひゃく騎きの敵てき兵へい。おうれさうびて。跡あとを追おひ来きる。かゞり
 武者むしゃの手て段だんさやころん。近ちかく進すすむ。遠とほ巻まきふ。ころか。こころを攻せめたり
 ける。かの武者むしゃを吃くとる。運うん命めいもこれまをさやとひく。笠かさ符ふひさ
 うらぐら。弓ゆみ胡こ録ろくとやうと。投な捨すて大おほ童どうふ。あり。大おほ太た刀とうと曹そうの真ま額がく小こは

かゞり三方さんぱうへ追お捲まきり八はち面めん小こ切きてまらり。ひる武者むしゃをを拜かがみ打うち立た破やぶ母はは衣え付け
 車くるま切き。衣え裳も小こ忽たちて。左ひだり右みぎふさむ。を。諸しよ膝ひざ雜ざて。のりけふく。せ。時ときの回まわ
 小こ二に十じゆ四し五ご騎き切きておと。三さん十じゆ餘よ騎き小こ手てを負おひせ。れ。兵へい共とも。まらり
 て。風かぜ小こ木きの葉はの散ちりぶ。く四方しやうぱう小こ乱らん。逃にげ去さり。げ。目め吟いんく。と見みえ
 くりくる。かの武者むしゃ勝かち小こ手てを負おひて。これを追お打うちんとせ。所ところ小こ山さんのうへり
 雨あめのむく。小こ遠とほ矢やを射やけ。系けいる馬うまの平ひら頸けい太た腹はら五ご六ろく。所ところ射やは
 くれハ。小こ膝ひざを折やぶて。嘔おうと倒たふる。かの武者むしゃの身み小こ。所ところの矢や。数かずおと。と
 義ぎ毛けのむく。折やぶり。射やをくわられて。大おほ太た刀とうをさ。り。まらり。つさ
 らる。まらり。立て。あり。る。まらり。屍しかばね居い。倒たふたり。安やす方かたハ社しゃのうら。めあり
 戦たたかの始はじめ終はつと。と。と。花はなや。る。合あ戦せんを。る。の。哉や天あま晴はらの勇ゆう士しと。と
 感かん歎たん。と。と。と。笠かさ符ふを。る。一いち定ぢやう街まち内うち小こか。て。名なの。人ひと。る。と。



相馬内裏
兵火お
やうや

善和巻之二

四



武藏五郎
お死なむ
安方公抱き
五郎が
なげけの妻
お死なむ
自害

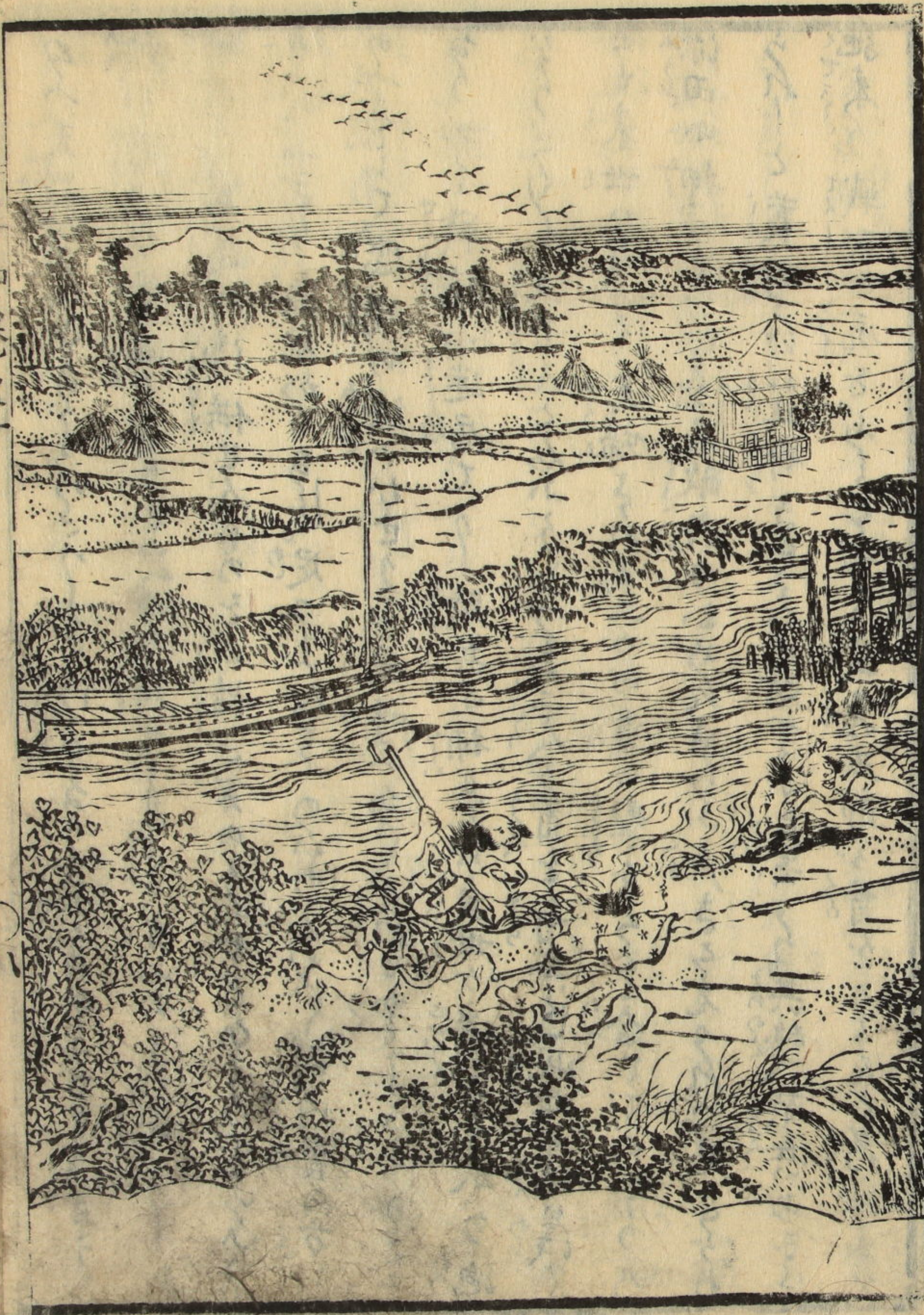
善和巻之三

せめての敵小首をさすせどと多ひつ。立寄て抱かじ。乱れる髪をかきわげ
て面をよりく見れば。あつて見知りたる老めて世ふまゝびなさま美少年
あれば。えいぶづくもわらじ。いま少一の息の息。いとどく早く耳ははき。
かんぞハ武藏権守興世殿の子息。武為五郎貞世殿小のむぎや。かく
しと某ハ六郎公連。一子次郎安方。ふてゆぎや。氣をほふりされよ。
いひかくこのあるまゝ。とくく某小告らじ。とよとむりりけき。ハ年負
ずりく眼をむくまて。安方が私をつんくとうらまあり。うれしげふ
打あそ苦げ小息をつさていひくる。奇しや安方殿。さいぐけを今
和服のひいぞ幸ある。りや商家の運命も今日限あり。夫ははき。て
和服小たのちかく奉あり。主君将門公の妾街。亂をやりしる。昨夜
いさふ親里へかごつはつら。左孕とせつれば。一定御男子御誕生

のんととひひさう。然とまの後日朝敵の胤あり。さび出され罰せしむ
ふりて。いさく悲しむる。さや。去る比伊豫國純友殿の腹心とれ。
海賊の首長伊賀壽太郎と云老棄取て主君小ふりし。大政官の印
陳中ふて某小のむぎ。今則此ふあり。それを和殿小ふべ。かの御誕生
の若君生立むり。和殿此印ととらえて京都小より。朝廷ふさげ。それ
を切小若君の御命を乞剃髪をさしめし。主君死御一門の苦提
ととひむふやふさうひむりれ。然とま一生を無事ふさふさ。と
ひて。鎧の引合より。錦の服紗小色さる官印を取出し。与重てのひくる
この私事ふて語さむ。とづりけき。とついでふたのちととら。某かのて
ひひさぐけの女あり。上野國沼田庄玉村に某の娘ふて。今幸嶋の陳中
かあり。某打死せしと。笑ハ一定嘆さるべ。いとと和殿かれ小ひむひ。

けり紙とてあふあふりれじとて涙しけし安方れをひらるる不
今日の打死かひての覚悟とええて一首の辞世をうたけけつ
敵をあと敵としか秘て思ひけん君が情を我仇あして
と心中の愁緒を述べて一命終るまゝとて主君とかり忠志の深き一首
のうらふりりれていと哀おおがえたり安方涙をおろしておん身の
遺言のりくすまげね某一命あつても若君の侍身のうへを安んじ
べ。官印いたしふあぐりやせしどけり紙もかの婦人あひと
あふ涙し最期の体もろりりりのがらるべし心残さを成仏めれといひ
けし武義五郎それ安てあつたも心残りゆらむ今唯主君の死
出のさだげせんことを望む所なれそ西小むひて合掌念佛教遍
こゝろろろ漸く小声もとり憐むべし生年十九歳を一期らして草葉

の身と消失ぬ安方多りく尾おむひのわくき若者を嗚呼惜む
べし悲むべし南無山靈頓證菩提まむらむらとてあふ所も
色した小袖もろ十五六歳の養女裙うけ素足おて息もつきあへど
走りつぎ安方お目もろけ武義五郎が屍もろりもろり声もろり
あつたさげびもろり絶入るる形勢かり安方それと心つき婦人上野國
沼田庄玉村氏の息女あつたもろりか的美女あつて涙をのびひ
いふも某いその老あつたもろりかおん身のい人もろり安方い
某相馬の御内おいて六郎公連といひ一老の二子次郎安方と
いふあつたもろり公連殿の子息もろり某い此身世無いひ
まづけの女もろり將門君下野國を打たひけ上野國高木山陣
取しむし時陳中の徒然おやくの美女をりもろりあつたもろり侍も



古郷ふ



うぢら
 安方を
 相馬の
 かちらど
 兄とぐ
 土民も
 賞銀を
 得と
 ろりかむ
 安方
 打散
 古郷ふ
 へる

善夫卷之二

のふ天罰さのひあがら。つらき汚らあり。某貧苦ふせまら。刃こら
瘦かそり。力量減どらとらとら。罰せらるる刃あふ。花ぐり
軍して。冥途の汚供せんものを。口惜き刃のうやとひとりごひつ。
奉死小ざり。齒かかむらじ。足つまだてのびわらむ。新内裏の方を
あみきいて。悲嘆の涙むせろが。嗚呼いぬこれとわら。さうりこ
あり。かく戦場小迷居てり。敵兵小捕らるべ。貞世が遺言も水の泡
なり。どりく立去んとふらまづき。二人が首を打お。此世の縁浅
らも末世はあが。夫婦なれと。二つの首の髻をらと合せて。あうり乃
源田小押うけ。又敵兵のおめれさけぶ声きえええ。見とら
られどと。蓑打け笠打きて。あつ立去ら。其跡へ敵兵あま
弛来ら。戦死の屍とあてえ。武義五郎が首をらんと尋けら

言多き。軀とえつ。さへ首盗人ありて。奪ひ去ら。大骨折て。鷹
ふらと。くらくらと。さうと。はふかまら。立おりね。後利根平八といふ
が。貞世が首と田の中より。又けけお。大将の実検ふと。あけと。押
安方への所を立去。あつ。往來の旅人の。あつと。将門の貞盛が矢
か。りて。亡。門類族。尺。と。鷲沼庄司も。打死。と。又今更の
かう。悲。旅衣の袖を。ら。た。夜ふ入りて
乃瓜踏違。のめ方小迷ひ行ぬ。然らぬ所。百姓等見怪めて。相馬の
落人小ま。これの。と。二三十人追取廻。本名と名。向くと
攻。り。安方。傍を。ら。両眼。を。を。
某と落人。と。あつ。打拍。を。あつ。某。遠國の。縁
人。ら。瓜。ひ。通。と。百姓。を。と。

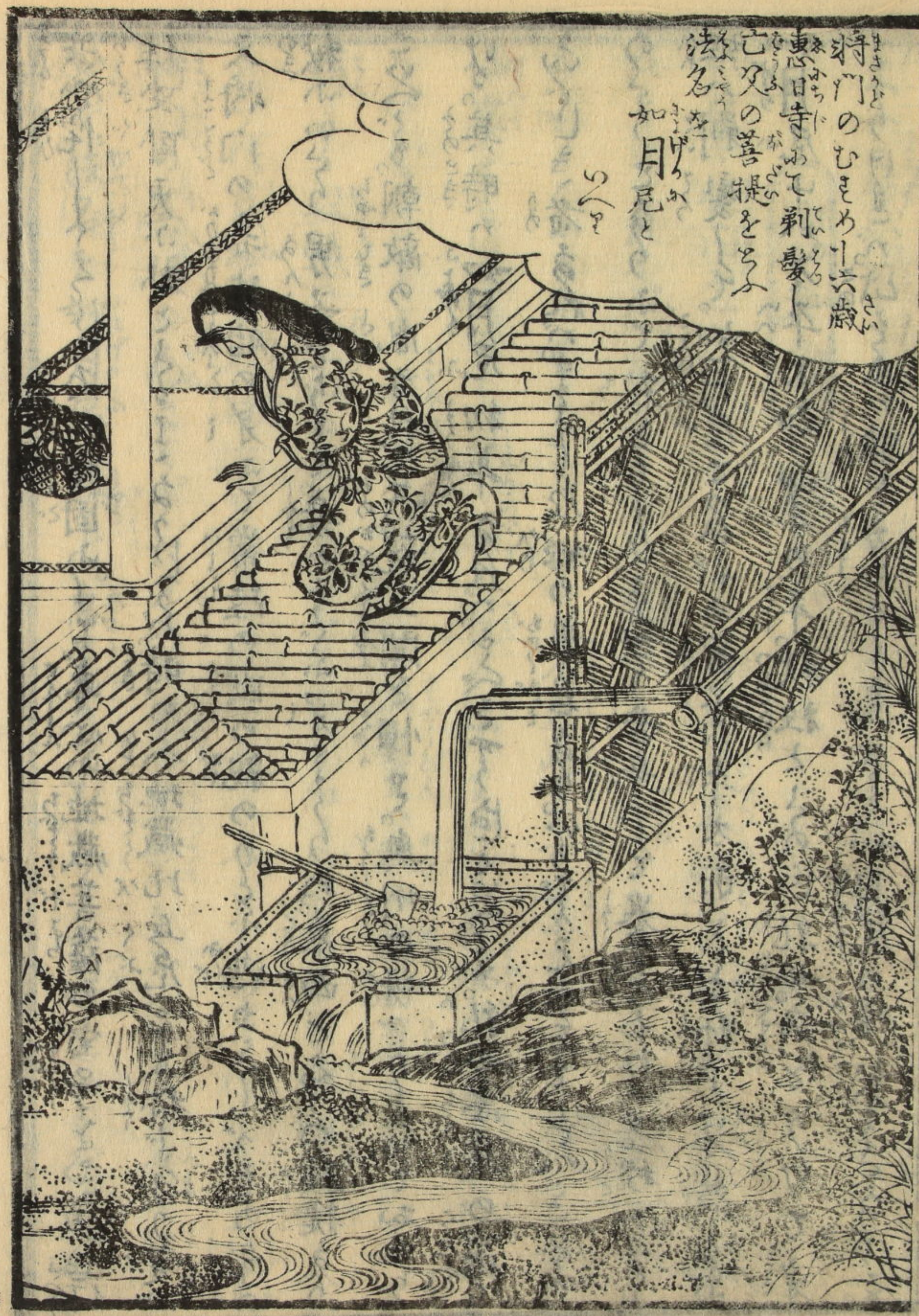
大小あぢい。いとくろく。其方へ走りたまへ

信の夫山

第二條

かねて将門一人の息女のりたり。相馬内裏滅亡の時、十四歳にて乳母
たもけられて。乱軍のうらを逃出。さき令とたさうりて。陸奥へ逃下り。
ろや。ふくくまでかりけり。元来此息女世ふまらる美人にて。國色
仙姿ともいひつべし。翠山小月のいでるが。姿おて。難内小梅のふこ
ろび。まごごご。粧あり。蟬娟なる両鬢。秋の蟬の翼をのぞひた。宛
轉する双蛾の遠山の色とどるええよ。あうの。もろもろ。聰明伶俐人か
まぬ。慈悲のふ。わねて。仏を。わづら。亡父
将門の菩提のゆゑ。十六才にて。縁の黒髪をおと。墨の衣。小姿を
おて。法名を如月尼と称す。惠日寺のわたり。小庵をむまひ。乳母と

共小佐。心堅固。専心地藏菩薩の宝号。こころへ行
住坐臥。更におこころ。よ。時の人地藏比丘尼。とも称す。爰小
又将門の妾懐胎の身。常陸の國の親のり。小逃。その年の
秋。い。男子。と。妻。小。東西と。ね。孩提あり
こ。朝敵の亂。其親上。聞。奥州の。わ。を
ける。其時。如月尼。幼年。され。と。乳母忠義の心。ゆ
う。者。あ。た。姫の弟君。あり。い。や。へ。こ
め。あり。乳を。ひ。苦辛。と。養育。け。程。わ
姫の剃髪。如月尼。の。男子。平太郎。と。稱。け。然。ふ
如月尼。十八才。平太郎。四才。の。年。杖柱。と。の。乳母。病。を。う。け。て。身
ま。け。誰。を。力。く。と。べ。如月尼の嘆。お。う。

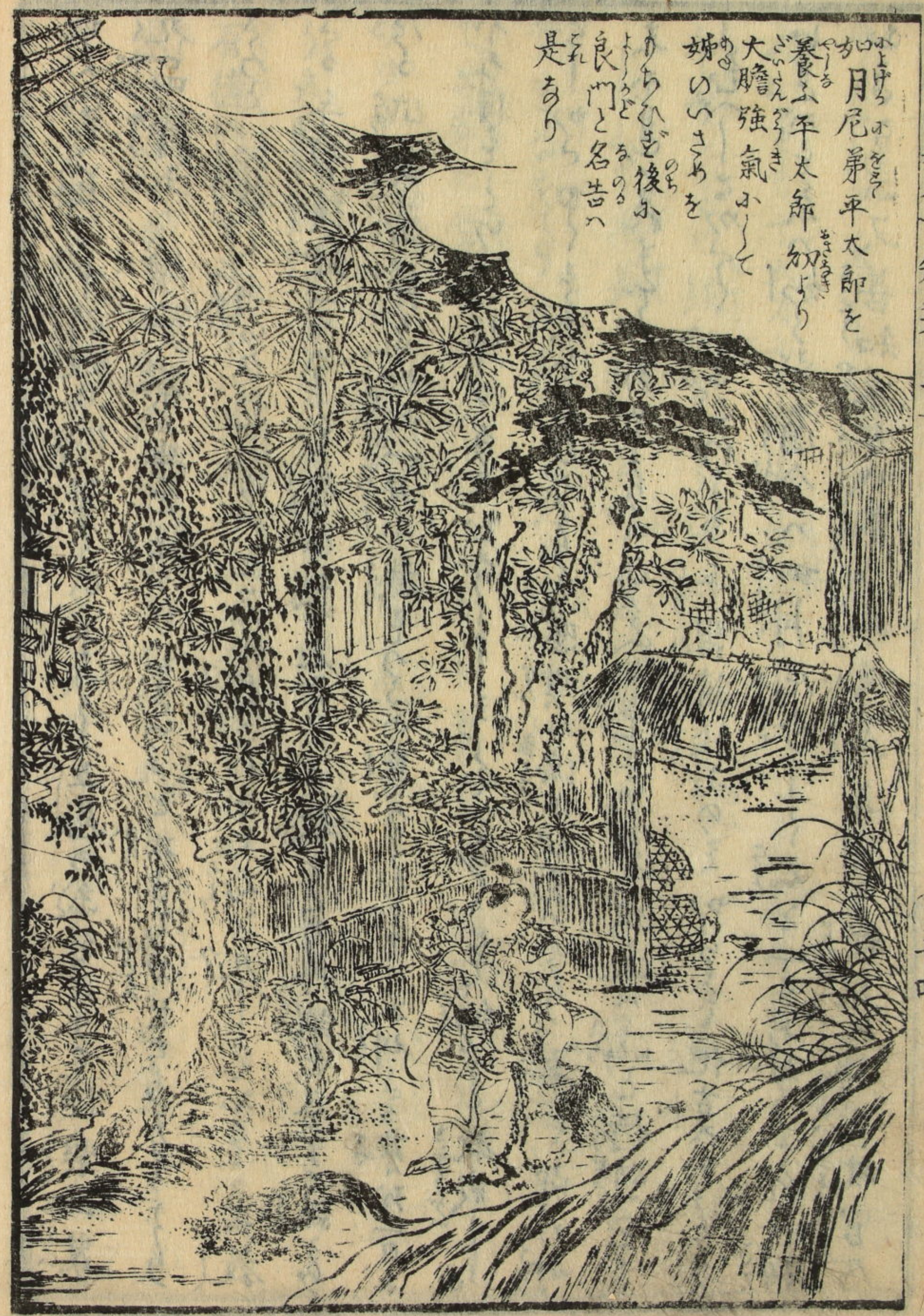
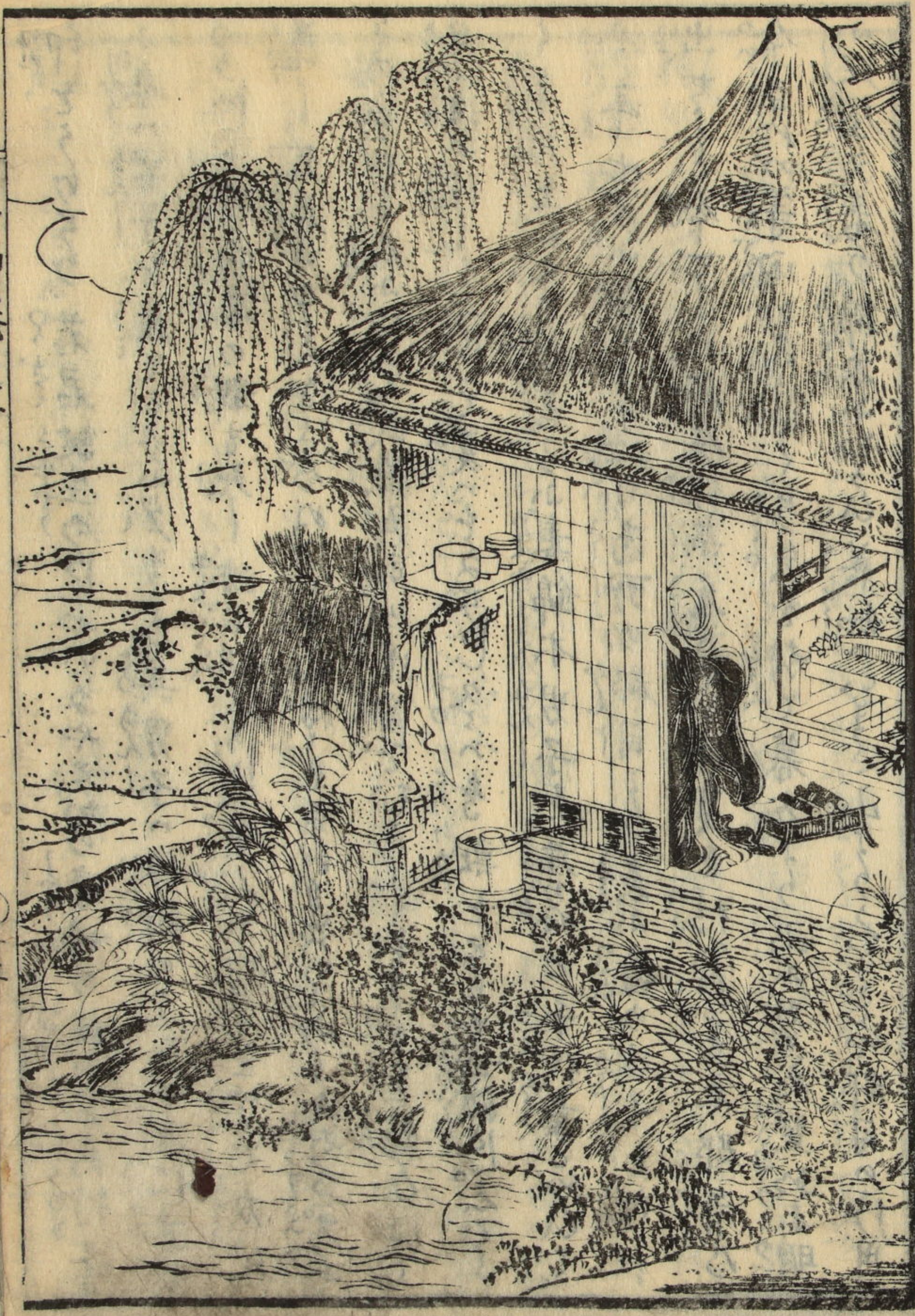


将門のむすめ十六歳
 恵日寺にて剃髪
 亡父の菩提をとま
 法名を
 如月尼と
 する

善知巻之三十一

のな死とあり。眞途の苦もさぞしとぞひやうて。毒もかく姿を
 久かきも十五才もあふ。出家せしめて。その善菩提をとへり。いと
 手習とせ経をよましむふ。一つして学ばむ。唯心くわく
 一もて。無益の殺生を好む。友の童を打とこさひるじて。のぬ悪
 業とるまじ。出家とるまじ。老の所行。向後ふくと悪ま行をやわ
 て。出家の業をんがけよし。おこころを藁のうへ襪襪のうらより。育
 のけらるけ。母も同然あり。貪く悲ま中ふられまを生立とる。妻が
 うき艱難。いづらうととるんぞや。おこころ出家とる。仏戒とたり。つて
 有徳の僧ともあらば。其時亡父の素姓ともやう。父とへ。亡父の
 悪ま心とて。非業の死しむひわれ。我く兄弟も世ふく。ま
 ねて。のまふふ人。文りのあうさる。えかり。まがやととる。く
 勤糸

せよとて。急て中將姫の例。小まきひ。手づく。五色の糸をとりて。極楽世界
 九品浄土の繪曼荼羅を織り。おまつると。おとら刀をとり。かうより
 さつと絶截し。再びひける。これをいよ。妻これまをんと尺して。おこころ教
 える。手習讀經。一つして。学ばむ。おえさる。日数をこり。丹誠を尽して。織る
 たり。曼荼羅を如此。一刀お截とる。小異あう。千日お刈る。茅瓦一日お
 かう。ほとこのひける。あり。むさう。うま。やい。あく。そ。細くと。教戒し。
 こ。か。め。も。ま。ま。と。と。ひ。と。う。て。悲嘆の涙。おむせ。び。たり。平。部。の。打
 ち。や。と。れ。ま。ま。の。の。や。ま。り。の。ひ。と。の。免。さ。せ。む。以。来。の。迄。と。行。跡。と。わ。う
 一。む。べ。ー。さ。か。て。誓。これより。手習讀經。おの。ま。つ。て。他。ま。又。か。う。り
 け。し。べ。と。ま。ま。の。知。り。ま。さ。分。の。如。月。尼。少。く。ん。と。や。と。わ。け。り。それ。の。相
 お。こ。こ。ろ。ふ。又。善。知。安。方。の。前。の。年。武。花。五。部。が。戦。死。の。時。大。政。官。乃



如月尼弟平太郎を
 養ふ平太郎 幼より
 大膽強氣ふくと
 婿のいさをを
 りらひむ後小
 良門と名告ハ
 是あり



平太助筑波山



平太助筑波山
入て異人おのひ
蝦蟇の術を
さぶらう

平太助筑波山

むの。つづろくおあひまうい知れども。甚危き御身あり。我一命しかへ
 ても若君の御身のうへと歩んどゞと。武義五郎小誓一詞いりて
 愛どゞ。幸願日少しの手がらと得られ。我急小旅返してゆ
 へをたゞ。武義五郎が遺言のどく。大政官の印と携て都小上
 若君の御助命を願て刺髪をとめ。其後我等夫婦も
 さゆとりて。まぐく仏つゝ。今より殺生とやむ。證んえよとて。
 引矢とらて折ぐ。もろとまの間の留ませよ。若君小づの
 の。たづら小吉左右とまむ。むとて。俄小旅の具とその官印
 と首わけて。飛足ふのむ。妻いとど。小別をわ。片時とやうり
 兼中身とひひて。涙さ。千代童の安方が旅衣の袖おとる。
 ちる。とま。とて。ま。さけ。矢猛心の安方も。子小ひ。されて。二。と。

